

日本仏教における食の思想(一)

——肉食忌避について——

目 黒 き よ

仏教が伝来されて以来、その思想は文化形成の基本となり、我々の生活の中に浸透し、特に食生活に関わっていることも多い。経・律・論に於いて食生活について説かれているところも少なくない。その中で肉食についても説かれている。たとえば『菩薩戒義疏卷下』^①には「第三食肉戒、断大慈心。大士懷慈為本一切悉断。聲聞漸教。初開三種淨肉等。後亦皆断。文云当知断現肉義。大經四相品。広明三種九種十種也」とある。

仏教においては肉食を忌避することは一般常識とされており、今日でも仏前の供物には、

魚肉を忌避することが一般の風習となっている。顧るに飛鳥、奈良時代以降、仏教が興隆されるとともに、肉食禁止の令が発せられ、

次第に肉食は忌避されて行った。しからば仏教は何故肉食を禁止したのか、又それをどのように理論化し、また実際に

受容したかの問題については、従来戒律の面から論じられてきているように思われる。それならば、末法無戒という認識に立った鎌倉新仏教の宗祖達は、肉食についてどのように考えたのであろうか。そのような視点から鎌倉時代の祖師達、法然、親鸞、日蓮について、肉食観をみることにする。

法然(一一三三—一二二二)は、仏教の行法の中から、とくに念仏の一行を選んだ。それは弥陀の慈悲の深さに、仏教への信仰を集中したのであるとされる。弥陀の本願こそが念仏であり、それを専修することが易行であるとした法然は、魚肉を食することの可否と往生との関係について、「くふにもよらず、くわぬにもよらず、ただ念仏申もの往生はするぞ、源空はしりたるとぞ仰られける」と述べている。ただし『七箇条起請文』には、

「可^レ下^レ停止^ニ於^ニ念^ニ念^ニ門^ニ号^ニ無^シ戒^ニ行^ニ專^ニ勸^ニ煙^ニ酒^ニ食^ニ肉^ニ適^ニ守^ニ律^ニ儀^ニ者^ニ名^ニ雜^ニ行^ニ人^ニ憑^ニ彌^ニ陀^ニ本^ニ願^ニ者^ニ說^ニ勿^ニ恐^ニ造^ニ惡^ニ事^ニ」と

あるのである。この二つの資料は次のような点を示唆しているといえよう。即ち法然の専修念仏による往生礼讃は、

無智、無戒、破戒の多くの社会層の人々を救済する爲に、画期的な意義を持つものである。たしかにこのような法然の真意を、自由奔放に受けとめた門弟の行動が、「制戒祈請文」提出の原因となったことも否めない。しかし法然自身は、持戒堅固な清僧で一生を過した人とされ、又法然が観進聖であった。法然自身如經勸進、病氣平癒の持戒を行じ、『門葉記』に両界堂上人、穀断上人と号した、とのことから拝察されるように持戒的であった。穀断は肉断であり、厳しい食の修行である。これらを考え併せて法然は、専修念仏の中で極めて厳しい肉食観をつらぬいたと考えられよう。又四十八巻伝、古徳伝には法然懐胎中に母が己に肉食を忌避していたことが示されており、法然の肉食忌避は母以来のものなのである。

親鸞(一一七三—一二六二)については、直接的なことは文献には見出すことが困難のようである。親鸞は法然の思想を継承し、法然の専修念仏を更に深化させ、他力本願を徹底した。一方自己の煩惱悪を認め、自ら清僧の殻を脱ぎ、市井の人々と共に絶対他力、救済を願ったとされる。この点、早鳥鏡正氏は、

「七十歳、十三歳の御影、野生的なお顔から、市井の庶民

の風格が感じられるのは、肉食妻帯を日本仏教史上始めて宣言し、実践した在家仏教者」と称揚し、又「門下の布教者に肉食妻帯を許したのも形式主義の禁欲生活に対する一種のレジスタンス。」であると、親鸞の肉食許容の一般的意義づけをしている。

しかし親鸞の妻帯については多く語られているが、肉食についての具体的な論考は少ない。それに対して、肉食忌避の本来的意義はともかくとして、末代の悪人にはその禁制が困難であるから、肉食の欲望を許して頂きたいという彼の弱き姿に偉大なる宗教革命を見、

あえて肉食忌避をしなかった親鸞の自由な自然な生き方を評価する論評には見るべきものがある。しかし、なお覚如の『口伝鈔』には、「親鸞上人が世俗の入道俗人等と同じく、魚鳥を食され、又袈裟御着用ありながら鱈を食された云云」とある。これは親鸞の徹底した無戒を表徴した、肉食観であるといえよう。

日蓮(一二三二—一二八二)は、法然、親鸞とは相違して、『四恩鈔』に「日蓮はさせる(爾)妻子をも帯せず、魚鳥をも服せず、只法華經を弘めんとする失により云云。」と肉食の禁止を明言している。法然、親鸞と同様に末法観に立って、日蓮は釈尊を師とし、法華經こそ末法の人々の救いであるとし、その教えは南無妙法蓮華經の五字、七字に包含され

ていることを確信して、生涯を徹した。けれども肉食禁止は仏教の伝統を継承している。筆者は、先学の研究に負いながら、日蓮の遺文を中心に、その食生活を検討したが、現存する遺文中に見る供養の品の中には動物性のものは見当らない。遺文の中には多くの檀越からの種々の品々が詳細に記されている。即ち穀類、芋類、海藻類、蔬菜類、果物類の他、大豆、みその類まである。なお日蓮は自ら、薬草畑を作り補給して、多くの弟子を教導したが、食物は全て植物性のものであった。ただ一回だけ「たこ」と命名されたものの供養があり、これが動物性のものか、植物性のものか論議されたことがある。これについては「たこいも」など植物性のものという解釈のほか、「干鱈」であらうとする、宮崎英修教授の推定などがある。何れにせよ、日蓮が肉食禁止の思想を貫いた生涯の清僧であったことは疑いの余地がない。

以上鎌倉新仏教の祖師の肉食観について、少ない資料の中ではあるが考察を行った。

仏教思想受容の上で、日常生活に関わりを持つ肉食忌避の思想は、急速に変化変貌する社会生活の中で、どのように展開してゆくかはひとつの課題であらうと考える。そのような視点から今後さらに研究を進めたい。

- 1 大正新修大藏經第四〇卷五七五頁上段
- 2 田村圓澄著『法然』一三二頁

日本仏教における食の思想(一)(目 愚)

- 3 昭和修新法然上人全集 四八八頁
 - 4 昭和新修法然上人全集 七八八頁
 - 5 早島鏡正著『親鸞入門』五二頁
 - 6 五來 重著『高野聖』増補一二七頁
 - 7 法然上人傳の成立史的研究第一卷六頁
 - 8 法然上人傳の成立史的研究第一卷六頁
 - 9 早島鏡正著『親鸞入門』一二頁
 - 10 本山荻舟著『飲食事典』二七七頁
 - 11 今成寛禪著『道元と親鸞の行證』四六七頁
 - 12 大正新修大藏經第八三卷統諸宗部丁四、七四二頁上段、中段
 - 13 昭 and 定本日蓮聖人遺文二二六頁
 - 14 昭 and 定本日蓮聖人遺文九一三頁
- △キーワード▽ 肉食観、法然、親鸞、日蓮
- (立正大学大学院)

新刊紹介

浅井圓道著

『法華品類日蓮遺文抄』

A5版・千二百頁・定価一五〇〇〇円
山喜房仏書林・特価一二〇〇〇円
昭和六十三年十二月三十一日刊